

異文化交流を超えて

東京藝術大学音楽研究科
音楽専攻・芸術環境創造領域専攻博士課程
楊 淳婷（ヤン チュンティン）

日本で幼少期を過ごしたことは、今思えば人生を左右した大きな出来事だった。台湾の大学で「日本文化」という科目を履修し、茶道や武士道などに関する知識を学んだのだが、正直、あまり共感できなかつた。それより、『どんぐりころころ』のメロディー、紅白で対抗する運動会、ファミレスで食べるお子様ランチなど、日本の暮らしの中で触れた音、色や味など、身体感覚が伴った日常的な経験の方が私なりにしっくりくる「日本文化」である。大きな「国」という概念と、私的な経験の間に生じた「ズレ」を鮮明に意識するようになったきっかけは、博士後期課程に入って在日外国人と関連した芸術活動についての調査を始めたことである。

1990年代から日本は多くの出稼ぎ労働者を受け入れており、彼らは日本での生活基盤を整えて子どもたちを海外から呼び寄せている。両親または片方の親が外国人である子どもが日本に多数いる。これら「外国にルーツを持つ子ども」たちの多くは文化や言語のギャップに悩まされ、家族や同級生とのコミュニケーションに困難を感じている。私は彼らの境遇を知らずに、自身の研究を容易く「アートによる異文化交流」と最初は考えていた。

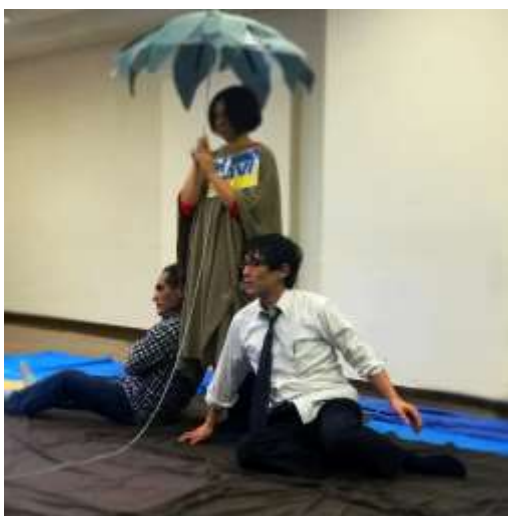
「アートによる異文化交流」といえば、自国の芸術・文化を他国に紹介し、他国から芸術・文化について紹介してもらうというショーケース的なイベントが想像されるだろう。実際私もそのような平行的な異文化交流に多数参加してきた。そこでよくある会話は、「日本ではこうだけど、台湾ではこうだ」というように、国や民族を基準とした文化比較である。しかし現実には、国を跨って日本で生活している人々は文化の狭間に生きており、出自の文化から遠ざかって（または知らないまま）日本社会にどんどん馴染んでいくのだが、日本で生まれ育ち、外国にルーツを持たないいわゆる「日本人」にはなりきれないところがあるのではないだろうか。また、アイデンティティの揺らぎを日々感じているのではないだろうか。

研究を通して、国や民族の枠組みでは捉えきれない外国にルーツを持つ子どもたちの現状を知っていくプロセスは、いつしか、日本と台湾を長年行き来してきた末、常に宙ぶらりんになったように感じる私自身を再認識する旅へととなっていた。そして、自身の過去と重ねて考えることによって、彼らの気持や課題に寄り添えるようになった。例えばある日、小学生の兄と歩いていたら、急に数名の男の子に追いかけられたことがあった。「走れ！」と兄の叫び声に驚いた私は、小さな体を必死に動かして兄の後ろについて行き、近くの草むらに隠れた。「なんで隠れるの」という疑問を抱えたまま忘れ去った一瞬の出来事は、数十年経った近頃になって記憶が喚起された。外国にルーツを持つ子どもは、見た目や名前など些細な「違い」で目立ってしまい、排除の対象となる可能性が高いのである。当時の兄もそのような一人だった。小学生になった私は台湾に戻っていたため、二度と心臓をバクバクさせる体験に見舞われずに済んだのだが、研究の中でインタビューした複数の子どもたちの話から同じような悩みを抱えていることが分かった。このような小さな「異質性への排除」の積み重なりは、彼らの自信や希望を奪うことになり兼ねないのではないだろうか。

2018 年末、外国人労働者の受け入れ拡大は大きな注目を集めた。外国人支援者たちは技能実習生の人権侵害の早期解決や、外国人の日本語教育を受ける権利を保障する法律の成立などを呼びかけた。特に、一部の自治体を除いてほとんどの学習支援の現場では助成金や人材が少なく、外国にルーツを持つ子どもたちの学習権が守られていないことが強調された。将来を見据えて外国人の子どもを日本社会に包摂するベクトルは、まだ十分に働いていないのである。

アートマネジメント・文化政策分野で学んでいる私にできることはとても限られている。しかし、少なくとも研究のテーマを然るべき方向へと修正することはできた。それは、表層的な異文化交流ではなく、在日外国人が直面している社会的排除の課題に向けて、アートを活用することの可能性を探ることであった。研究事例の一つ、「演劇ワークショップ」という実践では、外国にルーツを持つ子どもたちが自己表現の意欲に芽生えて生き生きとした姿を取り戻すことができ、その可能性が示されたように思えた。

「在日外国人の課題は、外国人だけの課題ではなくて日本人の課題でもある」と演劇人のすずきこーたが私に語ったように、この地に根を下ろす外国にルーツを持つ人々を「異邦人」ではなく、身近にいる「お隣さん」として捉えることを提案したい。日本で日常を送る「お隣さん」たちは、案外青椒肉絲（チンジャオロース）より納豆が好きで、花粉症に悩んでいて、様々な側面で「日本的」なのかもしれない。このような認識が広がることによって、異なる出自を持つ人々のふれあいは、異質なものがぶつかり合ってギクシャクする「異文化交流」から、多彩な糸が交差して織りなす色鮮やかな「多文化交流」へと、より積極的なイメージを持つようになるのではないだろうか。



写真：「セロ・ウアチパ」^{※注}の練習風景／作品「漂流者たち」

出所：筆者撮影（2016 年、世田谷区）

説明：無人島に漂着したスペイン語話者と日本語話者が言葉の通じ合わない状況で絶えず争い続け、ヤシの木を基準に国境を作り、ヤシの実を奪い合ったあとに疲れてしまった場面

※注 俳優のすずきこーたと日系ペルー人のセサルを中心に 2003 年に立ち上がった演劇グループ。主に大田区や路上演劇祭で活動している。